

うし おか い せき
牛 岡 遺 跡

一般国道1号日坂バイパス道の駅ランプ造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

掛川市教育委員会



例 言

- 1 本書は、平成16年2月23日から平成16年3月26日まで、一般国道1号日坂バイパス道の駅ランプ造成工事に伴い実施した、静岡県掛川市八坂に所在する牛岡遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国土交通省中部地方整備局の委託を受け、掛川市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、掛川市教育委員会の大熊茂広と村松弘規が担当した。
- 4 発掘作業ならびに整理作業では次の方々の参加を得た。
山崎辰雄 青島信二 松浦弘司 鈴木友二郎 久保井美代子 井筒いつよ 西田泰子
榛葉豊子
- 5 報告書作成にあたっては、加藤賢二氏のご教示をいただいた。ここに記して、深く感謝申しあげたい。
- 6 本書の執筆・編集は大熊が行った。
- 7 発掘調査業務は、掛川市教育委員会教育文化課が所管して、実施した。
- 8 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 挿図における方位は、真北を示す。
- 2 遺物番号は、挿図と写真図版とで共通する。
- 3 使用測地系は、世界測地系（測地系成果2000）である。
- 4 本書で使用した遺構の略記号は以下の通りである。 S P：小穴

目 次

I 発掘調査と遺跡の概要	2
1 調査に至る経緯と調査の目的	2
2 調査の方法と経過	2
3 遺跡をめぐる環境	3
II 調査の内容	6
1 遺 構	6
2 遺 物	6
III ま と め	13

【挿図目次】

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	4
第2図 調査地周辺地形図	5
第3図 調査区全体実測図	7
第4図 調査区壁面土層断面図	9
第5図 遺物包含層上面実測図	10
第6図 S P 01・02・03実測図	11
第7図 出土遺物実測図	12

【写真図版】

図版1 調査前風景（西から） 遺物包含層上面（西から）
図版2 遺物包含層上面（北から） 遺物包含層土器出土状況
図版3 調査区完掘状況（西から） 調査区完掘状況（南東から）
図版4 S P 01・02・03完掘状況（東から） S P 01・02・03完掘状況（南から）
図版5 調査区遠景（東から） 調査区遠景（南から）
図版6 重機稼働風景 掘削作業風景 計測作業風景
図版7 出土遺物 1
図版8 出土遺物 2

I 発掘調査と遺跡の概要

1 調査に至る経緯と調査の目的

掛川市域は、古代から現代に至るまで交通の要衝といえる。東西を結ぶ道として、古代から中世にかけての東海道、近世東海道、現代の国道1号線、東名高速道路、さらに第2東名高速道路が掛川市を通る。そして、南北を結ぶ道は、静岡県相良から信州を通り、日本海側の新潟県糸魚川へ続く、秋葉街道から千国街道につながる、いわゆる「塩の道」である。このように、掛川は昔から人の往来が盛んな土地柄であることから榮え、市内に所在する遺跡の数は500を超えている。この数は、県内でも屈指である。

この度、東西交通の大動脈として位置付けられる国道1号線の日坂バイパス沿いに、掛川市の積極的な誘致によって「道の駅」が計画された。計画地が牛岡遺跡地内に当たることから、平成11・12年度に遺跡所在の確認調査を実施した。その結果、計画地内各所で遺跡の所在を確認したが、駐車場やその他多くの施設の整備計画において、盛り土して施工するなど遺跡を保護しながら工事を実施する計画に変更されたことから、そのための本発掘調査は実施しないことになった。

しかし、その後バイパスの南側に道の駅へ誘導するためのランプ造成工事が計画された。平成15年1月29日に確認調査を実施した結果、ランプ造成計画地にも、牛岡遺跡の一部が及んでいることが確認された。協議によって、工事のために破壊を免れないことになる部分について、本発掘調査を実施して、遺跡の記録保存を図ることになった。

2 調査の方法と経過

平成14年度に実施した確認調査では、一辺2.5m、深さ2mの試掘坑を6箇所掘削した。その結果、当該地では、周辺の調査地点でみられた中世の遺物を包含する層が存在せず、耕作土の直下は縄文土器を包含する層となっていることを確認した。

そうしたことから調査では、まず、バックホウで耕作土を除去し、続いて、人工による縄文土器包含層上面での遺構確認を行った。包含層上面での遺構の検出はなかったが、その状態を写真撮影し、縮尺1/20で平面実測を行い記録した。

続いて、作業員による包含層の掘り下げを行った。掘削は、確認調査時に試掘坑にかかった小穴(S P01)を検出した土層で掘削を止め、遺構確認を行った。そして、検出した遺構を掘削し、写真撮影を行った。次に、これより下層に埋蔵文化財が存在しないことを確認するために、最終確認坑を2箇所において掘削し、完掘の状態を記録化するために、写真撮影と全体の平面図、調査区壁面の土層断面図の作成を行った。なお、遺構平面図と調査区壁面の土層断面図は縮尺1/20で作成し、写真撮影は、35mmのカラーフィルム、白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルム、6×7判の白黒プロニーフィルムにより記録した。

以下、その作業経過を記す。

平成16年 2月24日	調査準備
2月25日	重機による耕作土掘削
2月26日～3月11日	遺物包含層の上面と最終面の調査
3月15日～16日	平面図作成

3 遺跡をめぐる環境

1) 地理的環境

牛岡遺跡は、掛川市街より東に約5km、掛川市域の東端に位置しており、現在は、遺跡のほぼ中央を、国道1号日坂バイパスが縦貫している。

遺跡名となっている「牛岡」という地名は、現在は大字八坂のうちの小字である。江戸時代後期に編纂された掛川藩領の地誌である『掛川誌稿』に見える。それによると、中世に牛岡庄が存在したという記述がある。そして、「牛岡」という地名の由来は、潮河の略であろうとしている。この潮河という地名で「潮」という字を使うのは、この地区は昔から水の湧く豊かな土地であったことからではないだろうか。遺跡の南、影森のメノト遺跡から縄文時代後期末の、谷から湧き出た伏流水を利用した貯蔵穴が見つかるが、これは、こうした状況を示すことからではないだろうか。

なお、牛岡遺跡の西側には逆川が流れ、遺跡は逆川左岸に位置しており、逆川と開析谷によって形成された標高約55mの段丘上に立地している。

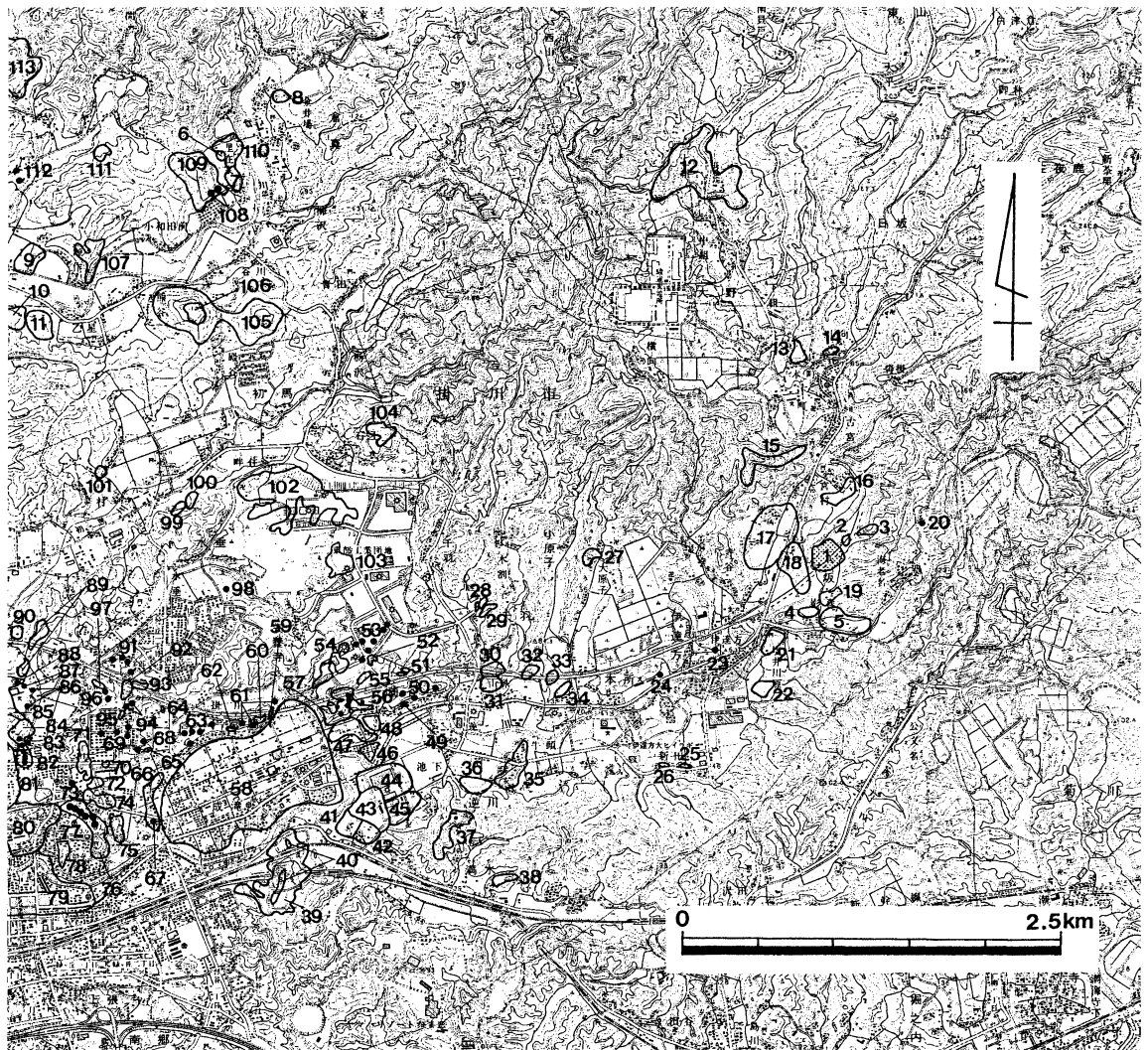
2) 歴史的環境

第1図には、市内東部に分布する縄文時代から江戸時代にわたる113の遺跡を示した。遺跡は、逆川の流れる平野部を中心に多く存在していることがわかる。第1図で示した遺跡のうち、1～11までが縄文時代の遺跡であるが、ここでは、逆川上流域の縄文時代遺跡に主眼を置いて、その様子を述べたい。

縄文時代遺跡は、現在のところ主に逆川左岸を中心に確認されている。3の向畑遺跡は国道1号日坂バイパス建設に先立ち調査した遺跡で、早期末の押型文土器の出土と、中期後葉の竪穴住居跡1軒を確認している。4のメノト遺跡は、後期中葉から末葉を中心に営まれた遺跡である。多くの土器と共に、打製石斧、堅果類の加工具と考えられる磨石等が多く出土している。平成10年度の調査では、後期末につくられた伏流水を利用した堅果類貯蔵穴20基を検出している。メノト遺跡に隣接して上位段丘面に立地する5の栗下遺跡は、これまでの調査で多くの柱穴や浅い竪穴状遺構を検出していることから、メノト遺跡に対する居住域と考えられる遺跡である。なお、遺跡の南東側に傾斜する地点では、大量の晩期の土器と土製耳飾りが2個出土していることから、墓域としての可能性が考えられている。逆川右岸に位置する17の八坂別所遺跡からは、小型の打製石斧1個と縄文土器と思われる小破片が少量出土している。

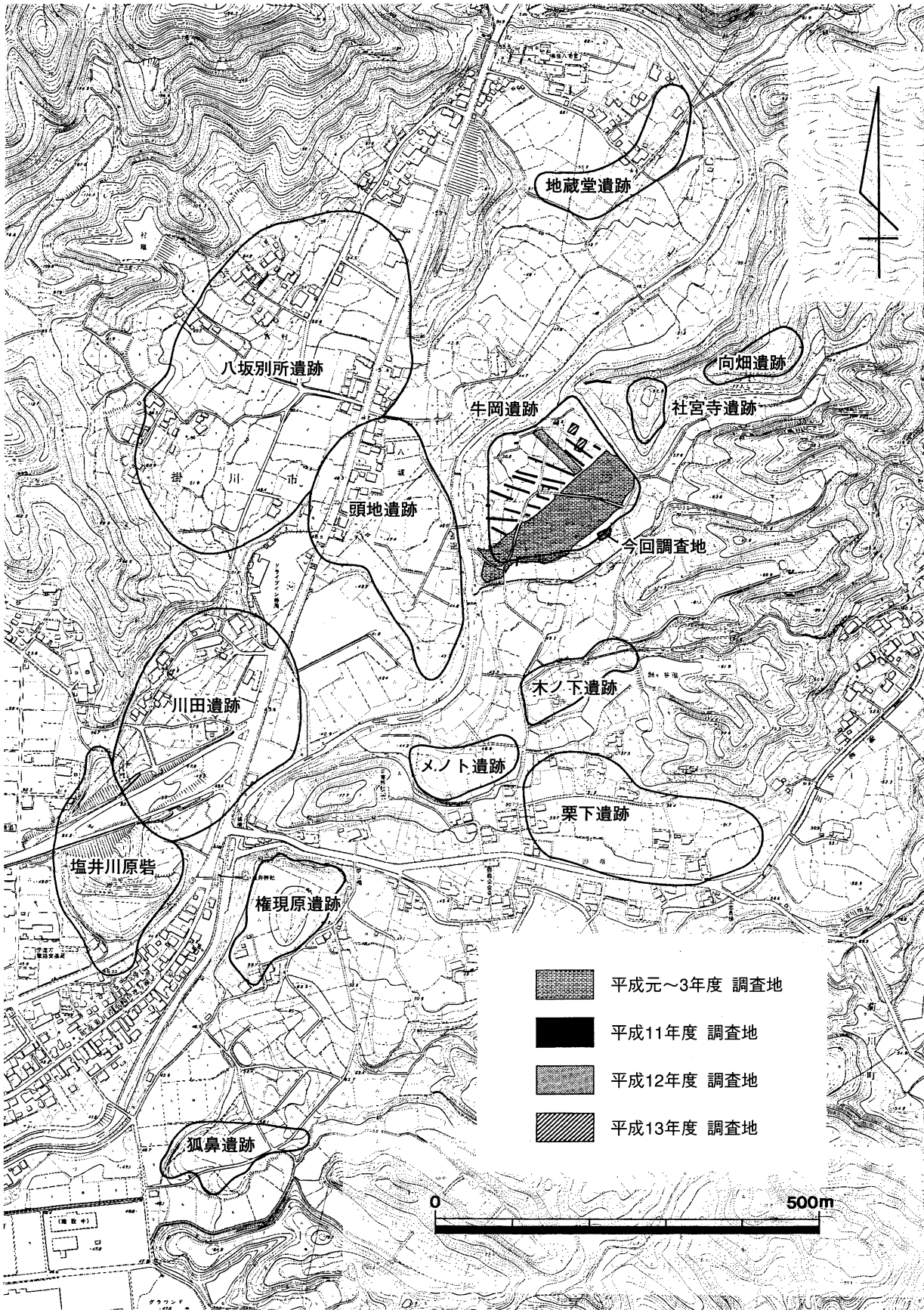
八坂地区は菊川市(旧小笠郡菊川町)と境を接しているが、丘陵地を挟んだ菊川市西方には、炭山ヶ谷遺跡がある。縄文時代の遺物として石器が出土しているが、詳細はわからない。

さて、話を牛岡遺跡に戻したい。牛岡遺跡では、これまでに4回の発掘調査を実施している。これまでに実施した調査地を第2図に示した。平成元～3年には、日坂バイパス建設に先立って、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所による発掘調査が実施された。それ以降、平成11年度に道の駅計画地内の確認調査、平成12年度に県の農免農道建設に伴う発掘調査、平成13年度には道の駅施設計画地の発掘調査が実施されている。それらの調査では、縄文時代、奈良時代、平安時代、中・近世の遺構及び遺物が確認されている。縄文時代に限ってその様子をみると、平成元～3年度の調査において、遺跡の南西端、旧逆川の自然堤防上に堆積した縄文時代の遺物包含層が確認され、そこから大量の縄文土器が出土している。土器は、早期末から中期までのものを含むが、特に中期後半のものが大半であった。遺構は検出しなかったが、土器がほとんど摩耗していないことから、至近の自然堤防上に集落が営まれていたと思われる。



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

- 1 牛岡遺跡 2 社宮寺遺跡 3 向畑遺跡 4 メノト遺跡 5 栗下遺跡 6 山崎新田遺跡
- 7 山崎寺中遺跡 8 金井場遺跡 9 柿ヶ谷遺跡 10 牛丸西谷田遺跡 11 牛丸上ノ山遺跡 12 松原城
- 13 大向遺跡 14 日坂陣屋 15 本宮山城 16 地藏堂遺跡 17 八坂別所遺跡 18 頭地遺跡
- 19 木ノ下遺跡 20 海老名経塚 21 権現原遺跡 22 狐鼻遺跡 23 向山窯跡 24 諏訪瓦窯 25 新田遺跡
- 26 中屋敷遺跡 27 鋤谷横穴群 28 大谷古墳群 29 大谷横穴群 30 郷下遺跡 31 往還北遺跡
- 32 後沢遺跡 33 宮ノ前遺跡 34 吉松遺跡 35 原ノ前遺跡 36 池向遺跡 37 踊原遺跡 38 原山遺跡
- 39 大六山砦 40 大六山遺跡 41 中西遺跡 42 高畑遺跡 43 天神遺跡 44 神子地遺跡 45 堂下遺跡
- 46 下川原遺跡 47 古明遺跡 48 寺峯遺跡 49 五平屋敷古墳 50 正源庵古墳群 51 御堂ヶ谷横穴群
- 52 深谷横穴群 53 深谷古墳群 54 深谷遺跡 55 谷通横穴群 56 峯山古墳群 57 峯山遺跡
- 58 山口遺跡 59 山郷山横穴群 60 山郷山遺跡 61 山郷山古墳群 62 横垂遺跡 63 宮脇古墳群
- 64 西田遺跡 65 西田横穴群 66 堀之内遺跡 67 神明神社古墳 68 西田古墳群 69 大ヶ谷古墳群
- 70 大ヶ谷横穴群 71 御所原遺跡 72 三城久保遺跡 73 狐塚古墳 74 井屋ノ谷遺跡 75 葛川西田遺跡
- 76・78 笠町砦 77 妙見山古墳群 79 掛川城址 80 掛川古城・子角山遺跡 81 下西郷遺跡
- 82 天王山古墳群 83 西山横穴群 84 天王山遺跡 85 原新田遺跡 86 下清水古墳群
- 87 でんでこ山古墳 88 八景山古墳 89 戸塚遺跡 90 日守田遺跡 91 大多郎古墳群 92 内籠遺跡
- 93 大多郎遺跡 94 大平山古墳群 95 大平山遺跡 96 宝田古墳群 97 宝田遺跡 98 文殊ヶ谷経塚
- 99 谷ノ坪Ⅰ遺跡 100 谷ノ坪Ⅱ遺跡 101 会下ノ谷遺跡 102 水垂城 103 庵安養寺跡
- 104 石上天王山遺跡 105 初馬城 106 熊ヶ谷大谷遺跡 107 小和田前遺跡 108 里在家古墳群
- 109 山崎鎮守遺跡・倉真城跡 110 藪下遺跡 111 平尾氏館跡 112 保戸貝戸古墳群 113 滝ノ谷城



第2図 調査地周辺地形図

II 調査の内容

1 遺構

日坂バイパス建設に伴う調査や農免農道建設に伴う調査で確認した牛岡遺跡の基本的な層位は、近・現代の耕作土の下には中世から近世の遺物を包含する土層が存在しており、その下に縄文時代の遺物を包含する土層が存在していた。そして、中世の土層と縄文時代の土層の間には、砂礫や砂利を主体とした丘陵地から押し出されたと考えられる土層が厚く堆積している。この土層に縄文土器が含まれている。今回の調査地点においては、事前に行われた確認調査によると中・近世の遺物を含む土が確認できないことから、後世に削平されたものと判断された。

第3図は調査地全体で縄文土器を含む包含層を完掘した状態の実測図であるが、北東方向から南西方向へ向かうごく緩やかな傾斜と、南側の谷へ向かう、ごく緩やかな傾斜がみられた。なお、図中の方位は真北を表す。

第4図には調査区の北壁、西壁、東壁の土層断面図を示した。北壁の12層が縄文土器を包含する層である。12層より上層では埋蔵文化財の検出が無く、近・現代の耕作土と考えられるものである。東壁の18層、22～27層に示されたものは旧水田の畦跡と考えている。28層、32層は、31層の砂利層に入るブロック状の粘土である。なお、40層は農地整備により造成された土である。

第5図に示したのは、縄文土器を包含する土層上面の遺構全体平面図と断面図である。縄文土器を包含する層は厚さ0.1～0.25mの堆積で、北東から南西方向への緩やかな傾斜が見られるが、ほぼ平らであった。

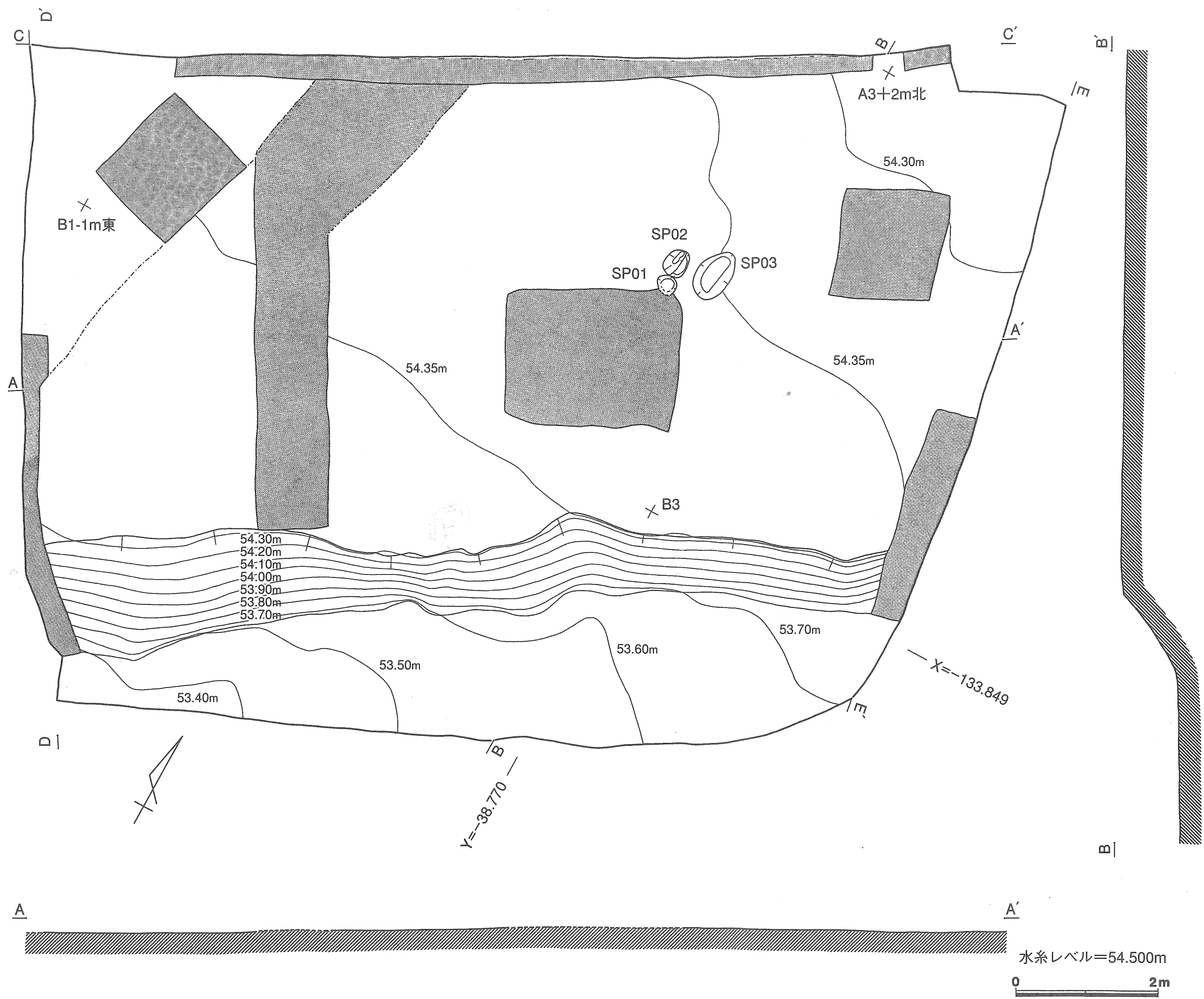
縄文土器を包含する土層の直下では、調査区中央東寄り、近接した小穴を3基検出した。なお、S P 01は確認調査時の試掘坑の壁面に観察されていたもので、調査区内からは、これ等以外の遺構は検出していない。

S P 01は平面形がほぼ円形で、径0.28m、深さ0.32mを測る小穴である。S P 02は平面形が楕円形で、長径0.4m、短径0.32mの大きさを測り、深さは0.14mと浅い小穴である。S P 03は平面形が楕円形の穴で、長径0.76m、短径0.47mと他の2つに比べ大きい。深さは0.16mで平面の大きさに対して浅い。3つの小穴の覆土はグライ土化しており、単層であった。小穴からの出土遺物はなかったが、小穴が縄文土器包含層の直下で確認されたことから、縄文時代のものと判断される。

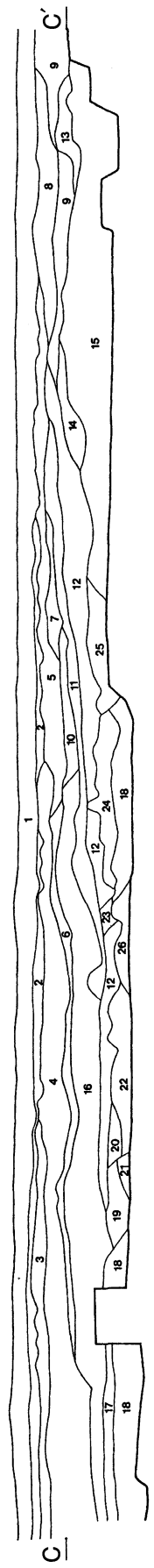
2 遺物

今回の調査で出土した遺物は、すべて縄文土器である。どれも小さな破片で、最大でも約10cmである。また、器面の摩耗が著しいものが多いのが特徴である。出土点数は、確認調査時に出土した16点と本調査時に出土した53点で、合計69点を数える。そのうち、保存状態の良い19点を図示した。1～5は口縁部、6～16は胴部、17・18は底部である。また、19は土製品と考えられる。

1は、深鉢の口縁部である。口唇端部から約1.5cm下に横位に引かれた浅い沈線と連弧状に区画した文様が施され、その内側には半截竹管状工具による縦方向の平行沈線が施されている。色調は暗茶褐色で、胎土には金雲母と1～3mmの砂礫、そして1mm以下の石英が含まれている。2は、深鉢の口縁部である。1と同じ沈線と連弧状の沈線による区画が施されている。器面の摩耗が著しいため、定かではないが、下部は無文のようである。色調は淡茶褐色で、胎土には1～2mmの砂礫が含まれる。3は、無文の口縁部小破片である。色調は暗褐色で、胎土には石英が含まれる。4も口縁部破片で、逆U字の区画を描く沈線が観られる。色調は暗褐色で、胎土には石英が含まれている。5は、口縁部

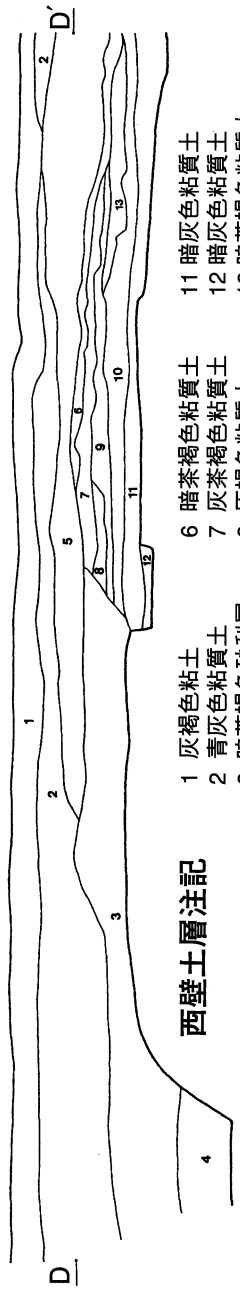


第3図 調査区全体実測図



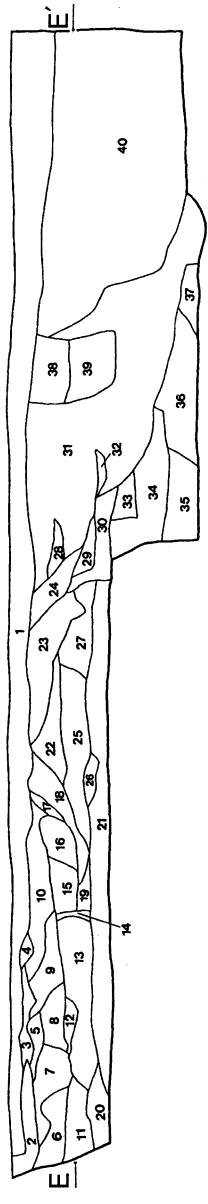
北壁土層注記

- 1 灰褐色粘質土
- 2 青灰色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土
- 5 黄褐色粘質土
- 6 黄褐色粘質土
- 7 灰褐色粘質土
- 8 灰褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 灰褐色粘質土
- 11 灰褐色粘質土
- 12 暗灰褐色粘質土
- 13 灰褐色粘質土
- 14 灰褐色粘質土
- 15 灰褐色粘質土
- 16 暗茶褐色粘質土
- 17 暗灰茶褐色粘質土
- 18 暗灰茶褐色粘質土
- 19 灰褐色粘質土
- 20 灰褐色粘質土
- 21 灰褐色粘質土
- 22 灰褐色粘質土
- 23 灰褐色粘質土
- 24 灰褐色粘質土
- 25 灰褐色粘質土
- 26 灰褐色粘質土



西壁土層注記

- 1 灰褐色粘質土
- 2 青灰色粘質土
- 3 暗茶褐色粘質土
- 4 暗茶褐色粘質土
- 5 淡黄灰色粘質土
- 6 暗茶褐色粘質土
- 7 灰褐色粘質土
- 8 灰褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 暗灰茶褐色粘質土
- 11 暗灰褐色粘質土
- 12 暗灰褐色粘質土
- 13 暗茶褐色粘質土



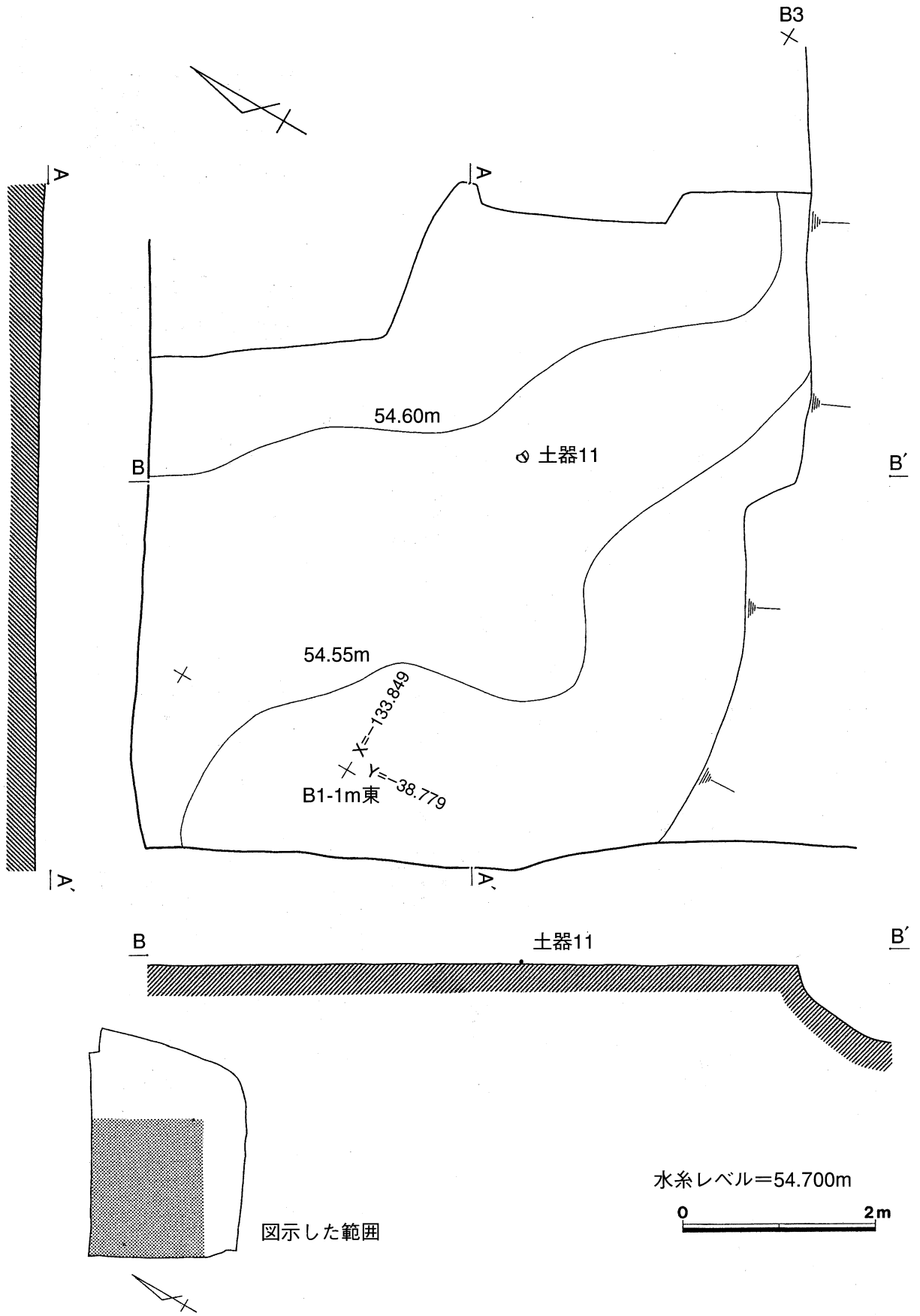
東壁土層注記

- 1 淡黄灰色粘質土
- 2 暗茶褐色粘質土
- 3 淡黄灰色粘質土
- 4 淡黄灰色粘質土
- 5 灰褐色粘質土
- 6 灰褐色粘質土
- 7 淡黄灰色粘質土
- 8 灰褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 灰褐色粘質土
- 11 黄褐色粘質土
- 12 黄褐色粘質土
- 13 灰褐色粘質土
- 14 灰褐色粘質土
- 15 灰褐色粘質土
- 16 茶褐色粘質土
- 17 灰褐色粘質土
- 18 灰褐色粘質土
- 19 灰褐色粘質土
- 20 淡黄灰色粘質土
- 21 灰褐色粘質土
- 22 灰褐色粘質土
- 23 灰褐色粘質土
- 24 灰褐色粘質土
- 25 灰褐色粘質土
- 26 灰褐色粘質土
- 27 灰褐色粘質土
- 28 灰褐色粘質土
- 29 灰褐色粘質土
- 30 灰褐色粘質土
- 31 茶褐色粘質土
- 32 灰褐色粘質土
- 33 黑灰色粘質土
- 34 灰褐色粘質土
- 35 暗青绿色粘質土
- 36 暗青绿色粘質土
- 37 暗青绿色粘質土
- 38 灰褐色粘質土
- 39 青灰色粘質土
- 40 淡黄灰色粘質土

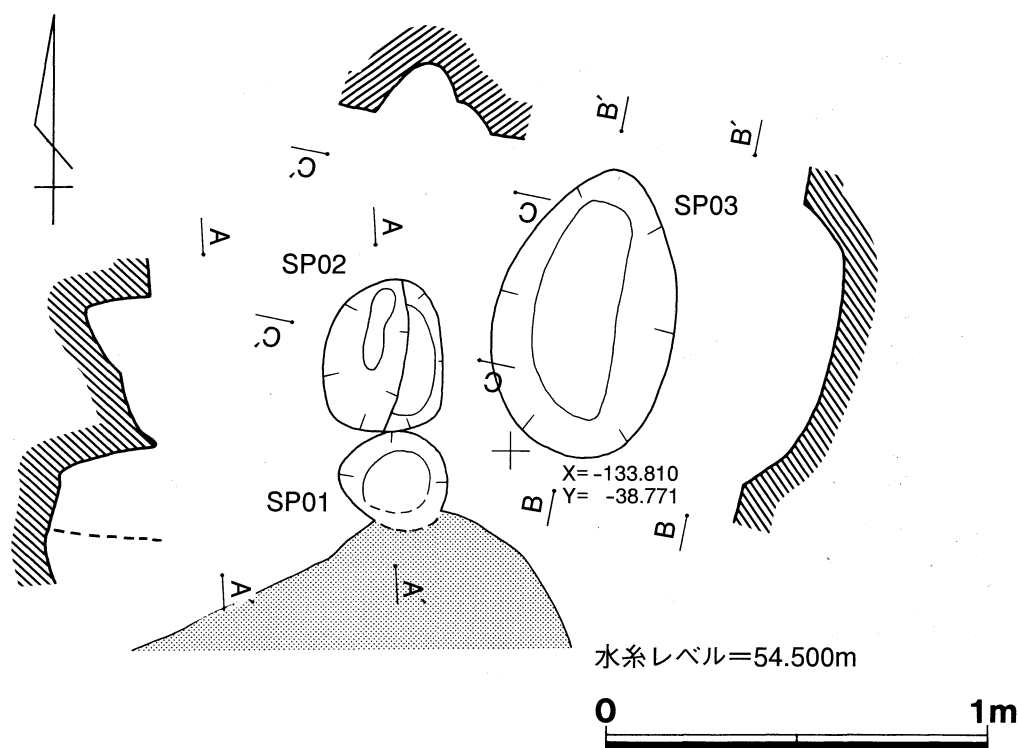
水系レベル=54.600m

 2m

第4図 調査区壁面土層断面図

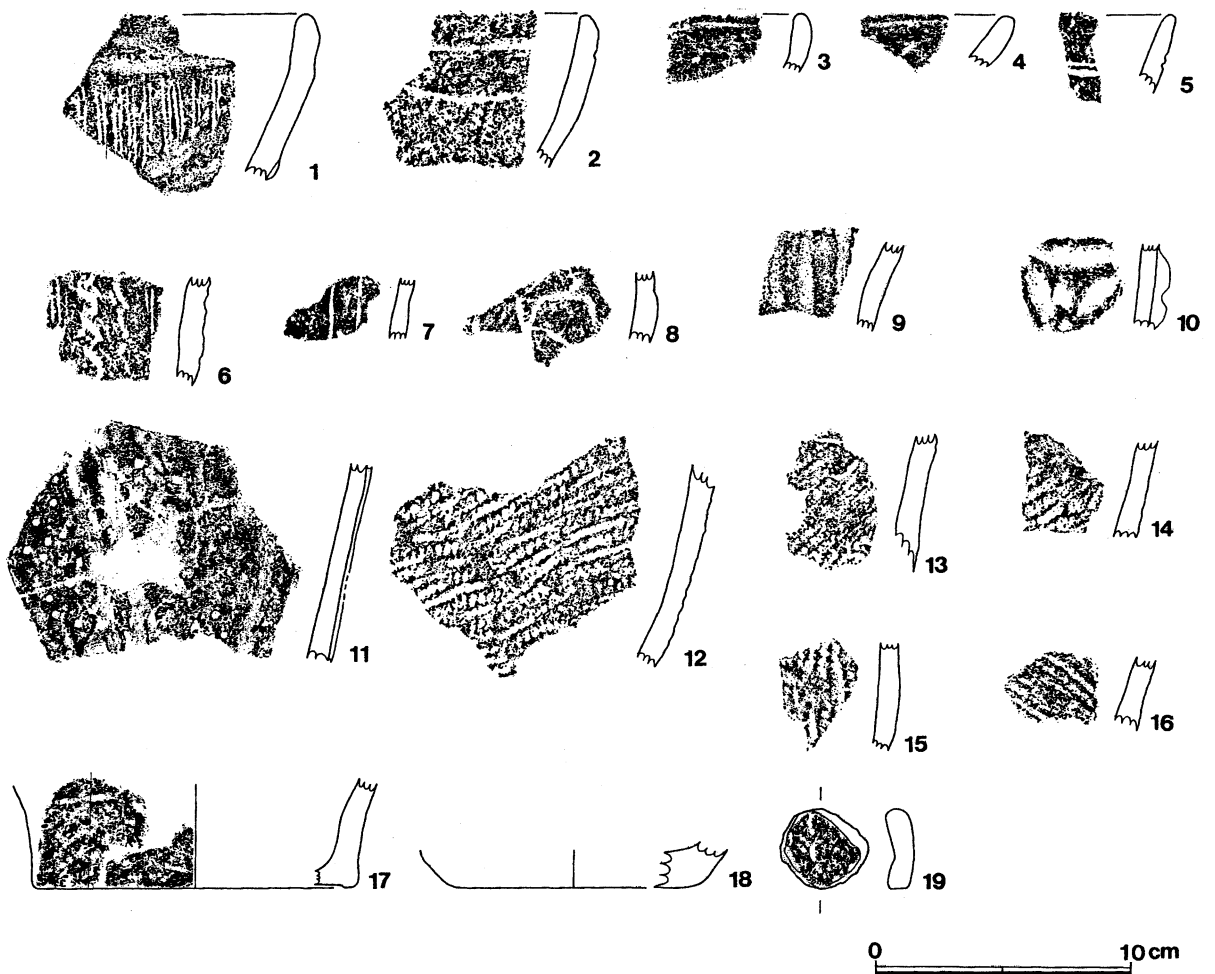


第5図 遺物包含層上面実測図



第6図 SP01・02・03実測図

小破片である。口唇から1.5cm下に、半截竹管状工具により口縁と平行の沈線を引く。色調は暗茶褐色で、胎土には1mmの石英粒を含む。6は、深鉢胴部破片である。半截竹管状工具による垂直方向の沈線で区画し、内側に結節縄文を施している。色調は暗茶褐色で、胎土には石英が多く含まれている。7は、深鉢胴部破片である。丸みのある棒状の工具による平行沈線で区画し、結節縄文を施している。色調は暗褐色で、胎土には1mm以下の石英が多く含まれる。8は、深鉢の胴部破片である。沈線により逆U字の区画文を描く。表面は摩耗が著しいが、区画文の外に縄文が施されているのが観察できる。色調は暗褐色で、胎土には1～2mmの砂礫と石英、そして2mmの赤色粒が含まれる。9は、深鉢の口縁部に近い部分の胴部破片で、幅約0.5cmの沈線が垂直方向に3条引かれている。沈線の断面形は丸みを帯びているため、管状の工具を使用したことが考えられる。色調は黒褐色で、胎土には1mm以下の石英が多く含まれている。10は、深鉢の口縁部と胴部を分ける文様帯の部分と考えられる。厚さ約0.5cmの粘土紐を貼り付けた隆帯上面に、先の丸い棒状工具による連続刺突が縦方向に施されている。色調は茶褐色で、胎土には1～3mmの砂礫と石英が多く認められ、1～2mmの赤褐色粒を含む。11は、深鉢の底部に近い胴下半部である。幅約1cm、厚さ約2mmの粘土紐を貼り付けた低い隆帯による区画文があり、内側を先の丸い工具で施した径3mmの刺突が認められる。なお、区画の外側にも同じ刺突が少し確認できる。色調は黄褐色で、胎土には1～3mmの砂礫と石英、そして赤褐色の粒子が含まれる。12は、幅4～5mmの横位の縄文が施される深鉢の胴部破片である。色調は暗茶褐色で、胎土には1～3mmの砂礫が含まれる。13は、縦位の縄文が施される土器片で、破片上端には幅3mmで浅い横位の沈線がある。色調は暗褐色で、胎土には1～2mmの砂礫と、石英が含まれる。14は、深鉢胴下半部の破片で、幅約5mmの縦位の縄文が施されている。色調は褐色で、胎土には1mmの砂粒と石英が含まれている。15は、右端に垂直方向の沈線があり、幅約5mmの縦位に縄文が施されている。色調は淡褐色で、



第7図 出土遺物実測図

胎土には1～3mmの砂礫が含まれている。16は、幅4mmの縦位に縄文が施されている。色調は暗灰褐色で、胎土には1～3mmの砂礫と石英を含む。17は、深鉢の底部破片である。底径は、復元で12.8cmと推定される。表面は摩耗しているが、底から3.5cm上に平行方向の沈線が引かれ、縦位の縄文が施されている。色調は茶褐色で、胎土に2～5mmの小石を含み、1mm以下の石英を多く含む。18は、深鉢の底部小破片である。色調は茶褐色で、胎土に1～3mmの砂礫を含み、1mm以下の石英を多く含む。

1は曾利Ⅲ式と考えられ、11は曾利Ⅳ・Ⅴ式の末期、18も底面の造り方から曾利式と判断される。その他は、いずれも加曾利ⅤⅢ式・Ⅳ式期の在地系の土器と考えられ、時期は、縄文時代中期末に比定できる。

19は、土製円盤と思われるもので、大きさは最大幅3.5cm、厚さは0.9cmを測る。深鉢土器の屈曲部破片を加工している。表面は摩耗しているが、縄文が施されているのが観察できる。色調は褐色を呈しており、胎土には2mm以下の石英が多く含まれ、1mm以下の金雲母を含んでいる。

Ⅲ ま と め

今回の調査では、検出した遺構や遺物は非常に少なかったが、ここでは再度その様子を概観し、まとめにかえたい。

今回の調査で検出した遺構は、小穴3基のみで、小穴はかたまつて検出した。大きさも、深さも小規模なものである。遺構内から遺物の出土はなかったが、縄文土器包含層の直下で確認したことから、縄文時代のものと判断される。また、調査で出土した縄文土器は、すべて包含層からの出土であった。土器の遺存状態は悪く、数も少ないことから、調査地で使われた土器ではなく、調査場所から少し離れた場所で使われていたと思われる。

ところで、平成元～3年度に実施された日坂バイパスに伴う発掘調査では、埋没した谷から土器等が多く出土した。遺構は検出されておらず、調査報告では自然堤防上に形成された集落が、逆川の氾濫によって削平されたと考察している。そのことから、今回の調査で検出した縄文土器の包含層は、丘陵地から押し出されて堆積した層であると理解する。このように近隣での調査結果を踏まえ、今回の調査地における遺跡の様子を整理すると、遺構の検出が少なく、出土した土器も遺存状態が悪く少量であることから、この場所は集落の中心から離れている場所であったことが考えられる。

また、今回の調査地の南側は急傾斜になっており、この場所が谷に臨む地形であることが考えられる。そして、その谷を越えた対岸付近では、県営の農地整備事業に伴い実施した確認調査で、縄文時代の遺跡の存在が確認されていない。そのため、牛岡遺跡の広がりを見ると、今回の調査地は牛岡遺跡の南端の一部と考えられる。

さて、最後に牛岡遺跡の今後の状態についてふれる。道の駅の範囲は牛岡遺跡のほぼ全域を覆うが、その工事は主に盛り土により施工されるため、過去の発掘調査実施箇所以外は被覆され、保存されることになっている。保存された牛岡遺跡の情報が、遠い将来まで残されることを期待したい。

【参考文献】

- 篠原修二他 1995 『牛岡遺跡Ⅱ』 (財)静岡県埋蔵文化財研究所
掛川市史編纂室 2000 『掛川市史 資料編 古代・中世』

報告書抄録

ふりがな	うしおかいせき							
書名	牛岡遺跡							
副書名	一般国道1号日坂バイパス道の駅ランプ造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	大熊茂広							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537) 21-1158							
発行年月日	西暦 2005年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うしおか 牛岡遺跡	静岡県掛川市 八坂	22213	K-491	38度 7分 70秒	133度 8分 50秒	20040223 { 20040326	200㎡	道路築造 に伴う造 成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
牛岡遺跡	集落跡	縄文時代中期	小穴	縄文土器				
要約	逆川により形成された標高55mの段丘上に立地する。調査では、遺構は小穴3基を検出し、遺物は包含層から縄文土器少量が出土した。調査地点は、縄文時代の集落の中心から離れた場所であることが考えられる。そして、牛岡遺跡の南端の一部であることが考えられる。							

※緯度・経度は世界測地系を使用

図版
1



調査前風景（西から）



遺物包含層上面（西から）

図版
2



遺物包含層上面（北から）



遺物包含層土器11出土状況（東から）

図版
3



調査区完掘状況（西から）



調査区完掘状況（南東から）

図版
4



SP01・02・03完掘状況（東から）



SP01・02・03完掘状況（南から）



調査区遠景（東から）



調査区遠景（南から）

図版
6



重機稼動風景



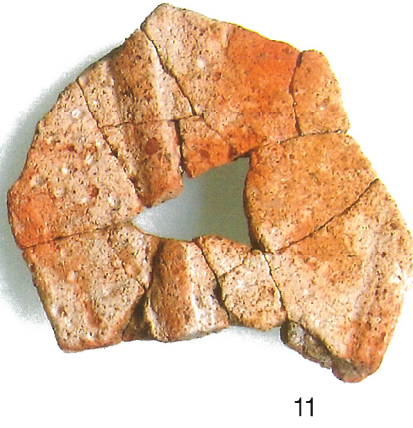
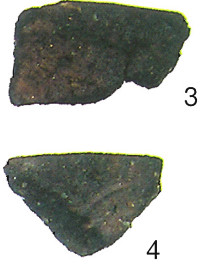
掘削作業風景



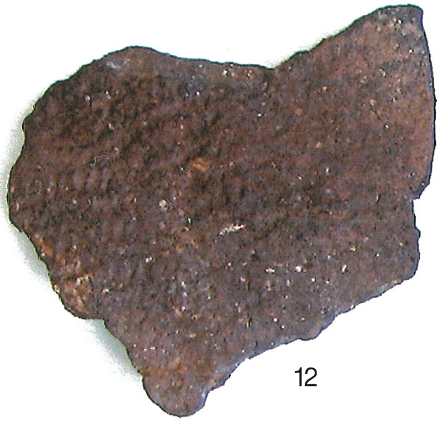
計測作業風景

図版 7

出土遺物 1



図版 8
出土遺物 2



12



13



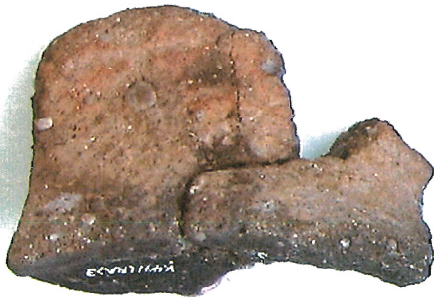
14



15



16



17



18



19

牛岡遺跡

一般国道1号日坂バイパス道の駅ランプ造成工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年1月31日

編集発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701-1
TEL (0537) 21-1158

印刷 株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248-1
TEL (0537) 24-0013

